

経済学入門叢書

3

価格の理論

岡本哲治著



東洋経済新報社

経済学入門叢書

3

価格の理論

岡本哲治 著

東洋経済新報社

著者紹介

大正15年 大阪府に生れる。
昭和22年 東京大学法学部法律学科卒業。その後、関西学院大学経済学部、灘中学・高等学校、東京都立大学経済学部を経て
昭和45年 学習院大学経済学部教授
主要著書 『現代経済理論のための数学入門』（共著、日本評論新社）、『自動車の需要予測』（共著、日本生産性本部）

価格の理論<経済学入門叢書>

定価 750 円

昭和45年10月12日発行

著者 おかもとてつはる 岡本哲治
発行者 村山公三

発行所 東京都中央区日本橋本石町1の4 東洋経済新報社
郵便番号 103 電話東京(270)代表4111 振替口座東京6518

© 1970<検印省略>落丁・乱丁本はお取替えいたします。 2033-9721-5214

は し が き

俗流経済学という語がある。本書なども、一部の人びとからは、この語をもって評せられることになるかも知れない。だが、わたくしは、通常この語が用いられる場合のとはいささか異なった意味ではあるが、本書は俗流の書である、と自認する。

俗という語に対して道という語がある。道俗と並置されて、道は出家してひたすら仏道を求める人、僧侶、を意味し、俗は在家の諸衆を意味する。道衆は人びとの霊心救済の道の専門家であり、俗衆はただ道衆に導かれて彼岸に達し得るだけの者だ、と区別されているようである。仏の心をどう解義するかはもっぱら道衆のなすべきことであり、俗衆はその解義されたところを聴聞して仏を信ずる心を養うほかはない者、と考えられている。

だが、道衆も人、俗衆も人、である。いずれの霊心も、ひとしく、救済されなければどうにもならないものであり、そして、救済される可能性を有するものである。そう考えるのが事の道理であろう。出家・在家という外^{そと}べの上に見られる区別のゆえに俗衆のなす解義は軽んじられ無視されるのがきまりになっていたのでは、あるいは、人びと（道俗とも）にとって大きな迷惑になるか

も知れない。

人びとは、みな、自らの幸福を願う。幸福であるかどうか、どの程度に幸福であるのか、を自ら確認するために、幸福の諸相を事物によって具体的に表現したい、と思う。つまり、人びとは外^{そと}への幸福を求める。それが、普通である。そのために、さまざまな財貨を求める。‘経済’という言葉で述べられる諸現象がそこに生ずる。それで、どんな財貨のどんな求め方がよいのかに関する問題を解義すること、つまり、‘経済学’が求められる。さしあたり、経済学において‘経済学者’は道衆であり、他の人びとは俗衆である。そう言ってよいだろう。

道俗の別にあまりに強くこだわってはいは、かえって、人びとにとって大きな迷惑になるかも知れない、とさきに述べたが、それでも、靈心の救済を願う時に道衆の説法を聴聞するのが適当であり幸便であることには疑いないと言えよう。それと同じように、どんな財貨をどのようにして求めるのが適良であるかを判断し決定する時には、経済学者の説くところを参考にするのが適当であり幸便である。一応は、そう考えてよいだろう。が、経済学者もやはり人である。経済あるいは経済学に関しての俗衆と同じように、自らの幸福を願うし、幸福であるかどうか、どれくらいに幸福であるか、を自ら確認するために、やはり、熱心に財貨を求めるに相違ない。制度上あるいは社会組織上、経済学者である、と目されている者の説くところ以外は、事が経済に関するかぎりには、軽んじられ無視されることが慣行になっていたのでは、同様に、人びとにとってかなりの迷惑が生ずるかも知れない。

それで、わたくしは、経済学に関してはむしろ俗衆に属するに

近いと自ら思いながらも、本書の稿を草する決心をした。

わたくしは、大学の経済学部出身ではない。だから、経済学者になるための正規の訓練、あるいは、由緒たどしい指導を受けていない。また、どちらかと言えば、わたくしの性は狭量狷介で、経済学に関しての人との交わりは少なく人に教えを乞うことも怠りがちであった。現代において、経済学の主流は北米合衆国にあるが、米人学者と通好することも別に欲しない。むしろ、それどころではない。

さきの大戦中、わたくしは、南九州の航空基地で、前夜食卓で隣り合せた仮の間の友をその翌日は死の定まった飛行のゆえに相見ることができなくなった経験をした。一時的に所属していた針尾の陸戦隊基地では、大村湾をへだてて長崎での原子の爆響を聞き、爆雲を見た。付近の海軍諸部隊の病室に収容された多くの被爆者の惨状を見聞きした。復員の途次に帰家に先んじて立ち寄った高等学校以来の心友の家で、長門艦上でのその友の爆死を知り、生い育った大阪の地を訪れて見れば一面の焼土であった。上京、復学してかろうじて法学士となった時、小学校の時以来の心友の死を告げられた。戦争のことであるから、わたくしのほかに、同様の経験の人は多かるう。米人の側でも同じであろう。そして、多くは寛闊に旧怨をぬぐい去って相親み相利しているのであろう。けれども、時が進み定命の残りが少なくなるにつれて、あの子が生きてあれば、あのひとが生きてあれば、あの友が生きてあれば、この人生はどれ程に幸せであったろうと、ますます、嘆きを深めていく人もあろう。どうやら、わたくしは後者に属するらしい、大戦終結後すでに4半世紀になると言うのに、どちら

かと言えば機着で怠惰な兵士であったように思われるわたくしが、いまだに、北米合衆国は敵国であるという意識から脱し切れない。もとより、報復の志などはさらさらないが、北米合衆国を好む気になれない（4半世紀前のその行動を思えば、ソ連邦も同様である。むしろ、一層の憎しみを感じることがある）。米人に親しむことをすすめられても、そのすすめに応じる心は一向に起らない。ついでながら、そのほかにも、国防を説きながら、自らは戦野に在ることを避ける傾向のある、あるいは、そうであった“いわゆる要路の人びと”に対して、憤りをおさえることができない。その戦野にないことの理由がその要路にあることになっているのが、この上なく憎らしい。戦野にあることの苦しさと恐しさを自ら知ることなく、したがって、おそらくは、その苦しさ恐しさを課されても、なお、戦争が必要であるというほどまでの判断をするのだとは思えないからである（当の本人たちの方では口では巧みに弁疏することであろうが）。人びとはすべて平等でなければならない。むしろ平等であるべく生れしめられている。と、わたくしは確信するからである。だから、経済の実際の動きを決定する諸事諸因に詳しいらしい“いわゆる要路の人”に接することも好きではない。そのため、並はずれて経済の実情に、わたくしは暗いだろう。そう、自ら考えている。

元来、専門の経済学者になるための訓練指導をまったく受けたことがない上に、わたくしの心性はざっと上のようなものである。ので、北米合衆国を中心として発達してきた現代経済学には、由緒正しい訓練・指導を受けたことのある他の人より、段一段、うとい、と自ら思っている。一応、昨年まで十数年間にわたって、

東京都立大学経済学部の教師をしてきたけれども、経済学に関しては、俗衆に近いと自認せざるをえないのである。本書を俗流の書と、はじめに、自ら述べた所以である。

昨年、わたくしは、ひさしぶりに戦争を目の前に見た。それはテレビジョン放送で伝えられたベトナムやアフリカでの戦争のことではない。

まず、大学立法反対闘争である。この闘争は正に車轍に向う蠅螂の戦いであった。しかも、その蠅螂は倨傲でありながら怯懦であった。木・石・金で奇怪に形づくられた像そのものを神であると信じた未開原始の人の信仰にも似た大学自治観をよりどころとした声明や行列、それが戦闘行動であるにすぎなかった。それに先んじて、東京都立大学の入学試験における自衛官受験拒否闘争があった。これは、威ただけで当の自衛官よりもずっと好争的な（あるいはむしろ、人の闘争心を煽ることを好む、と言った方が適切かもしれない）“平和主義者”である教師や学生の狡智の策が事を決した。もうひとつは学内紛争である。東京都立大学の場合は学生会館の管理運営の主導権をめぐるのふたつの派の争いであった。ほとんど一年間、学内は、国の軍隊を忌み嫌い、平和の愛好を強く唱える、いずれも好争的な、両派の兵士達の戦場であった。

戦い、争い、すべては人びとが互いに志を異にすることから生ずる。一人の志の完全達成が他の人の志の成就の障害になることから生ずる。が、人びとはともどもに同じこの世界にある。同じこの国内に生きる。同じ学内で学ぶ。志を異にするので、あるいは、その志の決定の基礎にある心を同じくしないので、その人は

あの人を嫌い、かの人はこの人を憎む、というようなことがあっても致し方はない。しかし、人びとがそれぞれに志を達成する道はないのだろうか。人みなが平等に満足させられるように、それぞれの望みを調整する仕方はないのだろうか。その手がかりを求めて、わたくしは、大学卒業後、ふとした機縁から、経済学を学ぶことにしたのである。米人を嫌いソ連人を憎むわたくしの心が、どうかしてこの生命のある間に、その嫌忌と憎悪がかりそめの外^{そと}への事にしかかかわらないものであることを悟り得るように、そのように願いながら、“近代”経済学に求めてきた。

多くの人が、近代経済学はひとつの技術理論である、と考えているようである。そんな人達は、上に述べたわたくしの願いと、その願いを近代経済学に託していることを、滑稽に思うことだろう。けれども、わたくしは、近代経済学を単なる技術理論であると考えるのは誤りである、と思う。その誤りは、近代的“価格理論”をよく吟味すれば、解ける。そう、わたくしは考える。本書の稿を草することを決心した理由を、そのように、言ってもよい。

ただ、再三いうように、わたくしは経済学については俗衆であるに近い。それゆえに、道衆の人びとと違って、これだけばかりの書に多くの時を要した。約束の期日におくれること、実に一年である。

また、こんな俗流の書を、人びとにとって最も重要であるかも知れない入門のための書として、出版することを奇怪に思う人があるかも知れない。けれども、道衆の大家の書に向っては、人びとは畏敬のゆえに批判の心を起こさないかもしれない。書を読

むには批判の心が大切である。中国の古賢の名言に“^{コトヲト}盡ク書ヲ信ズレバ、^{スナフ}則チ、書ナキニ如カズ”（孟子盡心章句下）とある。その批判の心とともに書を読むことを習うためには、貴重な入門書の群の中に、ひとつはこんな俗流の書があってもよいだろう。そう、わたくしは信ずる。もとより、わたくし自身が明知しえないことは、半行・一句たりとも、これを記さない心組で稿を綴ったが。

このあたりで、学習院大学経済学部研究室の人達、とくに、細田則子さんたち8人の助手の方がたに深く謝意を述べておきたい。この研究室の節度を失うことのない心あたたかさと、8人の婦人の規律正しい助手ぶりによって、ようやく、わたくしは脱稿することを得た。

ここは、細田さんだけでなく、8人のすべてのお名前を列記するのが妥当であろう。わたくしに直接協力して下さったのは細田さんであるが、他の7人の方々がそれぞれに、それぞれの分担を規律正しく処しておられたので、わたくしは細田さんの協力を得ることができたのである。世のことすべて、一事は万事に連なる。米人をいといソ連人をうとんずるわたくしの日々の暮しも、いずれは、米人、ソ連人を含めて世界のすべての人に、若干の巨細の差こそあれ、負っていることに疑いはない。わたくしに報復の心の全くないのはその故にであるかも知れない。とくに本書の叙述の中心をなすべき経済の一般的均衡を考えれば、ひとしなみに、池上雅子さん、駒沢洋子さん、隅田千恵さん、土肥原裕子さん、富岡美恵さん、細田則子さん、山崎協子さん、山田加代さんと、煩を惜しまずに記しておくのが、本書にふさわしい。と、わ

たくしは思う。

こう書けば、いずれも令名高い学習院大学経済学部先生方、また、これまでにわたくしが在職していた都立大学や灘高等学校、関西学院の人びと、さらに、この人びとに連なり連なる人びと、つまり、わたくしと同じくこの世を生きるすべての人に謝意をあらわすことを考えねばならない。いわゆる衆生の恩に思いを寄せねばなるまい。と、わたくし自らも考える。とくに、通常、ほかの人の著書ではなにをおいても逸しないことが慣わしになっている、わたくしが経済学を学ぶことになった機縁を作った下さった先生方のお名前をあげないのは、一層奇妙である。しかし、それは控えておく。ひとつには、その方がたをわたくしが畏敬することが余りに深いからである（こう言うと、8人の婦人にはまことに申しわけないが）。

もうひとつには、そして、こちらの方が主たる理由であるが、本書に直接のかかわりのあるのは、やはり、上の8人の方からである。本書でふれる経済学でのもうひとつの分野は部分均衡論の名をもって呼ばれている。経済は、精確を旨とすれば、一般均衡論によって観察・分析しなければならない。けれども、後章で述べるように、適当な条件が認められるので、見ようと思う経済現象の直接の周辺に限って観察・分析を試みても大誤のない場合が多い。部分均衡論が、今日において、なお、有効であるとされる所以である。そんなことも、この論旨には幾分の不徹底さと一貫性の欠落とが見られるのを自覚しながらも、考えたからである。それに、このうら若く明朗な8人の方のたのさわやかな協力調和ぶりは、まことに、類まれである、とわたくしは思った。

接すること未だ半年に満たないが、この中の誰が指導者であるというのでもないようだ。ほかに、誰といって監督する人がいるわけでもない。それなのに、まことに規律正しい、全体としての助手ぶりであるのだ。本書に説くべき内容にまことにふさわしい事例を見た。わたくしはそう、思った。それで、この方がたは、あるいは、迷惑を感じられるかも知れないとは考えたが、お名前を明記して、謝意を述べることにしたのである。

なお、ここに書き記しておきたいこと、と言うよりも、ともすればそちらの方向に筆がすべりがちになるのを強く感ずること、は多々である。が、この余のことはすべて私事にわたるので控えておきたい。

昭和45年8月

岡 本 哲 治

目 次

はしがき

第1章 序 説

1. 1 はじめに	1
1. 2 人びとが平等であることについて	5
1. 3 評価原理（その序説）	9
1. 4 評価原理の形成（心の自由について）	12
1. 5 独裁制と慣習制	17
1. 6 票 決 制	21
1. 7 票決制（つづき）	26

第2章 経済的意思（I）

2. 1 はじめに	31
2. 2 互求互譲制	34
2. 3 価 格	41
2. 4 需要の概念	50
2. 5 選好の概念	52
2. 6 価格変動の影響（その序説）	54

2. 7	所得補整の図説	59
2. 8	価格変動の影響（顕示選好理論による推論）	62
2. 9	需要の一般法則	65
2.10	需要量の変動の意味について	70

第3章 経済的意思（Ⅱ）

3. 1	双対性について	75
3. 2	価 値	83
3. 3	価値についての補説	89
3. 4	代替と補完	92
3. 5	効用関数と無差別図形	101
3. 6	収支均等での効用最大化	112
3. 7	価格変動の影響（再説）	123
3. 8	価値の決定（再説）	134
3. 9	補 説	139

第4章 生 産

4. 1	はじめに	145
4. 2	企業概念	153
4. 3	個人と企業との集り	157
4. 4	生産関数	165
4. 5	企業の生産計画（Ⅰ）	177
4. 6	企業の生産計画（Ⅱ）	195
4. 7	生産における限界代替率の0次同次性について	206
4. 8	長期と短期	213
4. 9	価格変動の生産計画への影響	228

第5章 需要と供給の均衡

5. 1 はじめに	235
5. 2 一般的需給均衡の可能性	242
5. 3 一般均衡の存在と安定性(1)	251
5. 4 一般均衡の存在と安定性(2)	258
5. 5 安定性について再説——部分均衡分析の一つの 根拠について——	267
5. 6 部分均衡分析の概要	278
(i) 需要・供給の変動と均衡価格の変動	278
(ii) 価格支配の可能性について	280
(iii) 独占者の利潤に関する図解	282
(iv) 差別価格	285
(v) 事前的心裡価格と市場均衡価格	286
(vi) 外部経済と社会的限界費用	289
(vii) 規模の経済	290
参考文献の紹介	293
あとがき	301
索引	317

第 1 章

序 説

1. 1 はじめに

むかしの経済学の教科書や講義には、economy の語源の説明からはじまるものが多かった。そう、記憶している。が、わたくしは、漢語の**経済**と**経済学**について語ることから、本書をはじめたいと思う。あらためて言うまでもなく、経済は economy の、経済学は economics または economic theory の、訳語として用いられている。現代において経済学がどんな学問であると理解されているか、を思えば、これは、まことにすぐれた訳語である。

経済は経国済民あるいは経世済俗の簡略である。国・世を秩序づけ、民・人を救うことの意である。秩序づけるということ、救うということ、はどういうことであるのだろうか。“一寸の虫にも五分の魂”のたとえのとおり、どんな人にも奪うべからざる志がある。意地がある。人びとにとって、その志が遂げられないことは、情ないことであろう。難儀である。その難儀を消し去ること、志を遂げさせること、それが民・人を救うの意である。人びとは、もし事ごとに志が遂げられずにいたならば、心は倦み世を

うらむことであろう。そんな人が多くなれば、国・世に確たる秩序が見られようはずがない。明治のはじめの五箇条の御誓文の中的一条に、“官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す”，とあるが、これを宣布した者の意図したところはどうかであれ、この一条の含意するところこそ、正に、経済である。

けれども、国・世に人の数は多い。中には他の人に障害を及ぼすことになるような志を持つ人もあるかも知れない。そんな場合には、適切な指針を掲げて志を修正・調整することの便を計らねば、経済を全うすることはできない。人間が月に到る事業は大変なものであろう。そんな事業を達成するためには、個々的にはどんな人にも可能な作業を、適切に、調整・総合すること、つまり、構組（システム）の形成、という難問を片付けねばならない。だが、それぞれどんな心であるのかとても知ることの出来ない数多くの人びと、その人びとの志をひとしく成就させるということとは、あるいは、月に到ることよりもずっと困難な事業であるかも知れない。すでに古く中国の晋代に、そのためには聡明大智の人を要する、と説かれているそうである（抱朴子、外篇）。

経済学も、国を治め民を救う術を研究する学問として、その高尚・難解であることが、唐代の一詩人（嚴維）によってこの語を用いて、うたわれている。最近、政治経済学（political economy の訳語のつもりであろう）の復位などと主張されること、が、しばしばであるようだが、そして、それは、いわゆる近代経済学の技術的理論性を批判する意味を伴ってのことのようであるが、“政治”という前称は余計のものである。また、近代経済学は、実